

比較思想と人文情報学

—— デジタル・ヒューマニティーズの現在から ——

下田正弘

一 情報通信革命が人文学にもたらすもの

二十世紀後半から世界規模で進行しつつある情報通信技術革命は、現代知識社会のありようを大きく変革してきた。この大規模な変化の底流には、あらゆる種類、形態の情報をいったん0と1という二値による記述、すなわちデジタルデータに轉換し、そのデータから情報を再構成して取り出すという、かつてなかったプロセスの出現がある。この轉換によって、以前とは桁違いの量の計算が、桁違いの速度で可能となり、これまで解決不能とみなされてきたさまざまな問題に解決の見通しが得られはじめた。

この変革は、基本的に、特定の意図をもつ個人なり機関なり国家なりが、上からの意思で先導してきたものではない。直近の問題をいち早く効果的に処理したいという、ほかならぬ人間

社会の根源にある願望によって突き動かされ、進められてきたものである。つまりこの変化は、技術をめぐる人類の歴史の必然的な帰結として起こっており、そのゆくすえをみつめることは、思想研究として重要な課題である。

社会、産業、文化、行政、学術、あらゆる領域でこの変革が進行するにつれ、これまで意識されたことのない、二つの現象が顕在化しつつある。それは、第一に、情報学や情報工学をとおして提供される情報が多様なニーズをもつ膨大な数の利用者に向けられるにつれ、利用者の側の対応が提供者の側に少なからぬ影響を与えはじめていることである。情報の内実の決定は提供する側のみ委ねられていたのではない。それは利用者の側にも託されており、提供者と利用者、両者の協働によって進んでゆく。

第二に、提供者と利用者の相互関係をとおして構成される情

報は、受授のたびに提供者と利用者の環境を変容し、情報の意味を変容している。つまり、情報を利用することそのものが新規データとなり、つぎの情報を生み出すあらたな源泉となっているのである。無意識になされる情報の「受授行為」じたいが情報「解釈行為」に浸透し、情報形成に影響を与えることが明らかになりつつある。

これら二つの変化が示すもの、それは、情報は、一方では受け渡しされる対象物でありながら、他方では授受行為を仲介する媒体ともなっていることである。情報は固定され、静止した客体物ではない。そこには授受行為が入り込んでおり、情報は授受行為の一部として、授受行為によって変容してゆく。

こうした性質を有する情報は、なによりも人文学の研究対象の中心を占める「言語」に酷似している。言語は、第一に、書き手や話し手という発信者と、読み手や聞き手という受信者との双方のあいだに存在する。第二に、それは、使用されるたびごとに、その同一性が強化されたり、弱化されたりし、言語じしんを微妙に変容させてゆく。第三に、言語は、授受されるところの内容そのもの、つまり情報そのものでもあるとともに、情報をやりとりするための手立て、媒体でもある。

デジタル化される以前のあらゆる情報は、こうした性質を有する言語によって構成されている。これを忠実にデジタルという形式に転換するのだとすれば、そのころのみは、ひとつの既存の対象物をべつの対象物に転換する作業で終わらない。それ

は媒体の転換でもあり、あらたな言語の創出をとまなう。

じっさい、デジタル情報技術の革新とともに出現したのは、いわゆるプログラミング「言語」であり、さらにウェブを代表とする通信技術の革新とともに現れたのは、マークアップ「言語」である。前者はデータから情報を構成的に抽出し、後者は異なる表記のあいだを連絡する。これら二種類の言語、およびそこから派生するさまざまな言語が協働し、あらたに大きな言語世界を急速につくりあげつつある。

二 情報のデジタル化と人文学の課題

情報のデジタル化をまえにした人文学者が目覚めるべきは、まさにこの事態である。すなわち、知識環境において、人文学がこれまで長きにわたって慣れ親しんできた自然言語とは異なる、あらたな言語が出現して世界のすみずみに浸透し、自然言語と共存しつつ、テキストを再編しつつある事実である。

かつてない、この言語環境の変化のなか、あらゆる科学の知識がそうであるように、人文学の知識基盤の転換も、情報学や情報工学によって先導されはじめた。すなわち、人文学の外の世界で生じるさまざまな問題が、人文学に直接に影響を与えはじめた。人文学が、このあらたな状況に沿って、みずからの学問が成立する基礎となる言語の概念を適切に進化適応させることができなければ、人文学の意義はきわめて限定されたものになってしまいうだろう。

十八世紀以降、自然科学あるいは社会科学の特性に浸潤された言語が社会に拡大するにつれ、かえって「純粋な」人文学の世界が顕著となってきた。だがそれは、人文学の言説が限られた世界に追い込まれてきたことの証左でもある。デジタル化を前提とした言語の出現によってこれから先に起こることの影響は、おそらくその比ではあるまい。

この課題に向き合い、情報学や情報工学と協働しながら人文学のあらたな進路を切り拓いている学問分野、それが人文情報学(デジタル・ヒューマニティーズ)である。「デジタル」と「ヒューマニティーズ」という語が結合して新たな集合単数形となるところから生まれてくるチャンスと課題によって描かれる」(A Short Guide to Digital Humanities, Anne Burdick et al, MIT Press, 2012, <http://21dtk.l.u-tokyo.ac.jp/dhc/sg2dl.pdf>) の学問は、およそ三つの方向から未来の人文学に備えつつある。第一は、資料のデジタル化が現出する領域横断的傾向に人文学を対応可能にすることであり、第二は、人文学の各専門分野が対象とする資料ともちいる方法の特性を人文学者たちに自覚的に記述させることであり、第三は、テクストが構成される事態そのものに対する原理的反省を人文学者たちに迫ることである。

これらはいずれも人文学を、ことに本稿の主題である「比較思想」といういとなみをとおして開顕される人文学を、より深い視点から照らしなおす契機となる。

第一の課題は、だれの目にも明らかなたちで現れてきてい

る。書物や論文、美術作品や諸事物のデジタル化が膨大な規模で進むことによって、書物のなかに閉ざされ、固有の事物として図書館や博物館の片隅に固定的に保存されていた知識は、物理的制約から解放され、国内の大学、図書館、博物館などの相違はもとより、国境さえ超え、ウェブというひとつのプラットフォームに出現した。その結果、書齋のパソコンのうえで、さらには移動中のスマートフォンなかで利用可能となった。

米国大学図書館の連合体が中心となって形成する *Haritrust* (<https://www.haritrust.org/>) や、米国公共図書館が共同で構築する *Digital Public Library of America* (<https://dp.la/>) などの大きな規模のデジタル図書整備は、物理的な図書館の役割がやがて終わり、それに代わって個人の目の前にヴァーチャルなかたちで出現する図書館のありようを顕著に示している。*Europeana* (<https://pro.europeana.eu/>) にみられるようなウェブ上の博物館は、美術館、博物館の役割の一部がすでにデジタル情報処理機能に委譲されていることを物語っている。

こうした変化は、学問の進展とともに専門化を進めてきた人文学を、領域横断的に解放しはじめている。じっさい、欧米のデジタル・ヒューマニティーズの領域で活躍する研究者が、ことに米国において顕著なように、図書館を中心とし、そこにラボを設置することによって研究、教育を推進している現実を知れば、研究領域の拠点となる地に大きな変化が起こりつつあることがわかる。

第二の課題は、人文学成立の核心に関わる。すでに述べたように、デジタル化があらたな言語を創成し、自然言語と共存する事実は、あらゆるテキストがこの混成的言語状況において表現しなおされることを意味する。もちろん、文字資料であれ非文字資料であれ、広い意味のテキストを解説するいとなみが人文学の中心を占めることにはなんら変わりはない。けれども、テキストを成立せしめる言語、メディアが転換されれば、そこに載せられる内容、メッセーシの形態は変容される。メッセーシの形態の変容は、形態に載せられる意味の変容を惹起する。媒体の転換という事態にあって、形態と意味との不可分な関係を追求しつづけないければならない。これはソース言語とターゲット言語のあいだをつなぐ翻訳の問題でもあり、人文学にとって未知の問いではない。

第三に、この変化は、テキスト研究に対する原理的反省を人文学者に対して迫る。それは「テキスト内在性」Intra-textualityと「間テキスト性」Inter-textualityという、二つの対照的な課題として現れてくる。これは比較思想に深い関わりをもつテーマであり、次節でべつ立として考察しよう。

三 人文情報学と比較思想研究の可能性

——「間テキスト性」と「テキスト内在性」について

「テキスト内在性」とはなにか。聖書研究やギリシャ＝ローマの古典研究に力を発揮してきたこの概念（Cf. Alison Sharrok

& Helen Morales (eds.) *Intra-textuality: Greek and Roman Textual Relations*, Oxford University Press 2000) は、時代を超えてひとつのテキストが読みなおされ、テキストに潜んでいた要素が顕在化されてあらたな解釈を生み出す事態を課題化する。ここには、固有のテキストやテキスト群のもつ意味は、それらの形式のなかに潜在的に保蔵されており、それは読み手の能力はもちろん、書き手の意図さえ超えているという、人文学の基本的な法についてのきわめて重要な理解がある。

テキスト内在性は、デジタル・ヒューマニティーズ分野への導入とともに理解がさらに深化し、人文学のテキスト研究にとって原理的問題を提起している。問題は、テキストとして保存された形式的事実のなかからいかに意味を引き出すかという点にある。

これまで「テキスト内在性」は、読み手の「読む」行為とその力量に依存すると理解されていた。だが、ここで「読む」行為の内実を客観的に課題化することが必要である。「読む」とは、具体的には、既存の辞書や文法書、さらに関連する諸テキストを参照し、そこに収蔵された情報を、語彙、統辞、文脈等の要素の差異に分解し、当該のテキストの記述に照合して「理解」をかたちづくる企図である。だが、それは、辞書やシソーラスというかたちで、当該テキストの「外部」に存在する意味を、アプリオリにテキストの内部にあてがおうとするころみであり、厳密にみれば、固有のテキストの内在性を明らかにす

るという目的にはそぐわない。

これに対して、デジタル化された資料においては、個別のテキストの内部にある語彙構成を詳細に分析し総合する、テキストマイニング、テキストアナリシスという方法が出現し、文学研究に本格的に導入されている。たとえば英国バーミンガム大学の英語学・応用言語学研究チーム(CIJC Dickens Project Team)が開発した、ディッケンズ作品分析のためのきわめて高い専門性に富むDickens Novels Concordanceは、主要十五作品のなかから特定のメタファー表現すべてを瞬時に検索することを可能とし(Cf. 船田佐央子「デジタル時代におけるディッケンズの文体研究」Digital Humanities Monthly, 2017.11.30 No.07 第76号前編)、記憶に頼った手作業による語彙整理ではまったくおよばない成果を生み出している。

これは、固有のテキストの外部にあるシソーラスに頼ることなく、特定の作品やテキスト内部から回収される情報のみによって独自のシソーラスを構築し、それに依拠してテキストの意味を構成する企図であり、テキスト内在性という目標は、原理的にはここにいたってはじめて可能になる。

つぎに「間テキスト性」はどうであろう。テキストの背後の歴史には、先行して存在する他のテキストの影響が浸透している。ひとつのテキストを読むとき、研究者はこれら関係テキストの影響全体を同時に読みとろうとしている。

比較思想という研究の方法は、個々のテキストやそこから読

み取れる思想を独立してあつかうのではなく、異なるテキストや思想との比較をおして、その意義を開顕するところのみである。とすれば、諸テキスト間の関係の把握、すなわち「間テキスト性」が研究の成否に関わる重要な鍵となる。

情報のデジタル化は「間テキスト性」を実質化し実効化するうえで絶大な力を発揮し、以前には望みえなかった研究環境を創出する。ひとつの大きな知識集成がテキストデータベースとして完成すれば、関連する情報を共起情報として抽出し、自動的に諸術語間の関連性を探り当てることができる。さらに複数のデータベースがWeb Application Programming Interface (API)によって連携され、膨大な情報の多様なネットワークのなかで当該テキストは甦る。現在、世界で急速に、壮大な規模で進みつつある情報通信革命は、直接的には「間テキスト性」をめぐる変革である。

デジタル化によって膨大な関係テキストが瞬時に検索され、回収されるとき、読み取られようとしている当該箇所は、この関係テキストのなかに明示的に位置づけられる。「間テキスト性」が大がかりに実現可能になるにつれ、個々のテキストの独立性、固有性は揺らぎ、間テキスト性のなかに融解しはじめる。

四 比較思想と人文情報学

「間テキスト性」と「テキスト内在性」という対照的なテー

マは一見、相反するようでいて、じつは一对の表裏をなす方法的概念としてあつかう必要がある。これらの概念は、比較思想研究に原理的反省を迫る。

比較思想は、一見すると、ひとつの既存の思想とべつの既存の思想とを、外部から俯瞰的に批判する企図のように思われるかもしれない。つまり「間テキスト性」の問題に尽きるかのようにも見えるかもしれない。日本の比較思想研究の立役者である中村元による、異なる思想の比較とおし、やがて両者を包摂しつつ凌駕する「普遍思想」に類する思想を設定しようとするところのみは、「間テキスト性」の問題に帰着する。

だが、思想を研究するさい、比較対象となる「テキストの外」に立ってなしつづけることは、厳密には不可能である。思想を比較する場合、研究者は異なる二つの思想のあいだを繰り返し往復しつづ、それぞれを同時に把握しようとしている。この往復運動は、比較の対象となるそれぞれのテキストに固有の言語によって浸透されており、その解釈行為には両テキストが有する「テキスト内在性」が浸透している。したがって比較した結果は、比較対象の思想を構成するいずれの言語からも自由ではなく、いずれの思想からも自由ではない。つまり「間テキスト性」は、あらたな「テキスト内在性」を創出し、研究者はその内部からテキストを解説することになる。

この原理的制約のなかで比較思想研究を成り立たせるためには、比較する対象となる諸テキストをひとつのテキスト群に適

切にまとめ、研究対象として信頼しうるテキストコーパスを構築しなければならぬ。そのさい、まず、歴史的、文化的、伝統的、個人的関心のバイアスができるだけ避けるとともに、あらたに研究すべきテキストが出現したとき、それをふくめてコーパスを拡大しうる必要がある。

この二つの問題を、より理想的なかたちで同時に解決しうるもの、それはデジタル媒体をもちいる人文学である。計算機によって抽出される共起情報に人為的バイアスはすくない。あらゆる制度や言語の制約を超え、異種の情報体系を接合させて拡張可能とし、あらたな体系とすることこそ、情報学、情報工学の本命とする仕事である。

知識基盤のデジタル化をめぐって起きている事態をめぐり、以上のごくかんたんな概観によってさえ、二十一世紀の人文学研究、比較思想研究が、人文情報学、デジタル・ヒューマニティーズを視野に入れることなしには、開きえなくなっていることがわかるだろう。あらたな言語の出現と急速な浸透、そして自然言語との共存、この事態を適切に把握し、対応すべき原理を示すことが期待されているもの、それはほかならぬ人文学者であり、なにより異なる体系のテキストを比較して思想研究を進める比較思想研究者である。あらたなデジタル時代、比較思想研究者に託された期待は大きい。

(しもだ・まさひろ、仏教学、東京大学教授)